

# 第42回世田谷特攻観音年次法要

9月23日 世田谷区上馬観音寺



会 報

# 特 攻

平成5年12月

第18号

〒105 東京都港区虎ノ門  
3-6-8 第6森ビル  
財団法人 特攻隊  
戦没者慰霊平和祈念協会  
電話 03(3432)1090

編集人 田 中 賢 一  
発行人 木 村 元 正

当日は生憎の雨だった。小降りだったので式典には支障なかったが。一昨年から恒例になっている会員の油絵展示は、山門内や観音寺本堂の軒先などに掲げ、見栄えがしなかったのは残念だった。

この法要は特攻観音奉賛会（特攻隊慰霊顕彰会と団体）の支援で観音寺が行うもので、本年度で四十二回になる。参列者は遺族戦友合わせて約三〇〇人、悪天候にも拘らず戦友の参加数は変わらないが、年々高齢化が進み、若い人の姿は見られない。このまま推移すればいつかは途絶えてしまうこと必定で寒心に堪えない。

菊水の旗いく度か、我が陣頭に翻えり  
今宵限りの上弦の 月に沈める山波は  
命に換える我が祖国  
今書き残す一言に 忠即孝と称えしも  
断ち難き思たらちねの 公報受けし面影に  
余生長かれと唯祈る  
人生 僅か五十年 その半にも満たぬとも  
後に続くを信ずれば 心に残るくまもなく  
流るる雲に溶け入らむ

## 目次

世田谷特攻観音年次法要	1
八月十五日の靖國神社	5
飛竜夜間雷撃隊	6
特攻随想③	8
「出陣学徒壮行の地」碑	10
特集南九州航空碑①	11
鹿屋12 串良15 知覧16 都城20	19
会員から寄せられた歌	19
特攻隊員の手記	21
特操之碑頌徳祭	23
来年度の会報編集について	24
会からのお知らせ（法人認可）	19



### 山主願文

恭しく伏して惟んみるに、天地開闢以来、この世に生を享けしもの、幾十百千万億兆なるを知らず。

その間、同種相集い、同族相結んで国をなし、互に境を劃し、相互反目反噬してその国土の拡張を図り争奪して止まざること百千万劫なり。

就中、中世以降、西欧の諸列強は、善良盲昧の後進諸国を併呑し、もろもろの種族を圧伏して殖民の苦を与え、その野望の樂を取りぬ。世界の旧秩序即ち是れなり。

我が邦は、古来平和を以て八紘為宇の大理想となし、万邦融合の大理想を掲ぐることに、ここに三千年、昭和の聖代に至り、世界に一大新秩序を齎らさんことを庶幾し遂に曠古の大戦となる。

一億同心。打ちてし止まんの豪氣蕩々、挙国戦務を努むるも、奈何せん、彼我の戦力隔絶し、戦勢日に非にして、大事將に去らんとす。

茲に忠勇無双の紅顔の烈士、自奮自励、九死に一生を期せず、特攻以て敵機、敵艦船を求めてこれを屠り、敵陣營の膽を奪う。その拳の壮烈にして、その果の偉大なる、全世界の矚目するところなりき。然りとはいえども、遂に惨絶の敗戦に會す。我が邦無前之苦難、あやんぬる哉。

特攻烈士の挺身殉国の表情を付度すれば、人皆言辞を嚙み、熱涙胸宇に充つ。

それ人身は享け難く、その生を終るや難し。前漢の大史公司馬遷にこれを聞く「人固より一死あり。死或は泰山よりも重く、或は鴻毛よりも軽し。これを用うるに趣くところ異なるなり」と。

特攻勇士の諸靈は正に忠烈の龜鑑なり。諸靈が父母の恩愛を断ち、大忠、大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境界に想到せんか誰れか万斛の涙なきを得んや（以下略）

### 祭文抜粹（奉賛会会長瀬島龍三）

「当時皆様の誠忠遺烈により全軍将兵の闘魂烈々として燃上り総ての国民は深く深く感動致しました。連合軍に於てもこの世界戦史に未だ嘗て見ざる日本民族の闘魂に驚愕多大の衝撃を受けたのであります」

「このことは戦敗れたりとも雖も日本は分割占領せらるることなく天皇制も保持され今日の復興発展にどれほど寄与されたかはかり知れません。私共は英霊の皆様の御遺績を戦後半世紀一日も忘れることはできません。

本会は今後とも特攻烈士の御遺績を広く国民の皆様知って頂きこの史実を正しく後世に伝えることができますよう努力致す所存であります」



一般焼香の列。小雨降る中を戦友達は続く。海軍軍服及び塔乗員姿は海軍軍装会の人々。

### 追悼文抜粋

(遺族代表義烈先挺隊荒谷猛弟昇殿)

「今でも亡兄への慕情は忘れ難く追憶の数々が脳裏を離れません 小学生の頃母の里に遊びに行ったことや宿題が出来ず夜遅くまで教わったことと等優しさのみが今でも走馬灯のように思出されます。」

「いづれのご遺族の方々も散華された英霊に対する憶いを馳せられるとき思い惚ぶ心は私以上に深く断腸の思いに涙なきを得ず痛恨の極みは如何ばかりかと推察申し上げます。」

戦後私達は懸命になって働き英霊の御加護のもと祖国に今日の繁栄をもたらしました しかし私達の働きたるど祖国の為一命を擲られた英霊の方々の勲の足元にも及びません」

### 特攻隊員の遺書抜粋

菊水の旗幟を我が陣頭にたてぬ

今宵限りの上弦の月に沈める山波の

命に換え我が祖国

今宵も遺すことと忠即孝と称すも

断難き思ひならぬ公報受け面影に

余生長かれと唯祈る

人生僅か五十年も半に満ちぬとも

後続を信ずれば心に燃きまもなく

流るる雲に浴け入らむ

岩本秀明の遺書



展示した油絵は写景画14点、肖像画20点、何れも特攻に因むもの。出品者は生田惇、伊藤直之、松本武仁、中野友次郎、市川国雄の諸氏。別に冒頭頁に掲載した歌(作詩田中賢一)を揮毫した高木秀明の書も出品された。

吟石橋一歌

笛佐伯竜静

七たびも生れかはりて守らばや

わが美しき 大和島根を

(山本卓美)

身はたとえ異郷の空に果つるとも

大義に生きん 兄と諸共

(曾根 信)



本年もまたトルコ大使館付武官フエリダン・ギユウライ海軍大佐が夫人同伴で参列され、次の(一部抜粋)追悼文を英語で奉呈した。

「特攻隊員は再び生還する可能性のないことを承知のうえで敢然として任務を遂行された最も勇気ある軍人でありました。私はその立派な精神力と功績に対し同じ軍人として心から敬意を捧げます。ここにお集りの遺族や戦友の方々はこれら偉大な特攻隊員の愛国的行為をさぞかし誇りに思っておられることでありませう。」

我々トルコ人もその思いは同じであります  
過去には東郷提督や乃木將軍やアタチルクのような英雄が現れまし  
た。将来も特攻隊員のような英雄の  
あとに続く者が現れるであらうこと  
を私は信じたのであります」



## 戦友代表の追悼の辞

陸海軍特攻隊員戦友を代表し、在天の戦没特攻隊の英霊に最近の出来事を三点ご報告申し上げます。

第一点は昭和天皇と特攻隊の関係でございます。戦後、昭和天皇と陸海軍特攻隊とは無関係であった、と長く伝えられて参りました。事実、本日の慰霊祭協賛の「特攻隊慰霊顕彰会」の諸事業においても、その記録資料なく、憂慮の役員、決して皆無ではありませんでした。

ところが本年四月、海軍団体の特潜会提供ビデオ「天覧特別攻撃隊」「海軍省製作」を拝見致しますと、昭和十九年十月十一日、昭和天皇におかれては海軍水雷学校に侍従武官今井紋次郎海軍中佐をご差遣になり、震洋特別攻撃隊四個部隊に対し、「健闘せよ」との聖旨を賜っているのであります。

聖旨を押し戴いて謹読する水雷学校長大森仙太郎中将と同じ壇上の今井侍従武官、それと校庭に整然と並ぶ震洋隊約一千名の隊員たち、すべてが感激の面持で壇上に注目しておりました。私は当時、第十六震洋隊艇隊長として、この伝達式に参加致しましたが、戦後四十八年間、この重大事を忘却、

脳裏に浮上させることが出来ませんでした。さきの映画を見ての記憶回復はまことに申しわけなく、昭和天皇、在天の英霊に謹みて深くお詫び致す次第であります。

昭和天皇が海軍水雷学校に侍従武官をご差遣になり、震洋特攻隊員をご激励されたことは、当時伝達式に参加の私の部下隊員村田善正一等飛行兵曹のその日の日記にも記載されていることを私はしかと確認いたしました。

昭和天皇と特攻隊との関係を陸海軍特攻隊戦友会にお知らせしたところ、陸軍①教育隊長齋藤義夫氏（陸士44期）はじめ各特攻隊隊員たちから「俺のところにも侍従武官をご差遣になった」との声が次々と大きく響きました。本当に有難いことでございます。昭和天皇は特攻作戦開始前から全国の陸海軍特攻部隊に対しこのように多大のご関心とご期待を寄せられていたのであります。さればこそ世界史初の特攻展開と相成、赫々大戦果を挙げる事が出来たのでございます。

昭和二十年二月十五日、比島コレヒドール島沖で米船舶三隻を撃沈致しました海軍第12震洋隊は私たちと同じく、さきの聖員伝達式に参列した部隊であります。この戦闘には全員体当りの特攻戦を敢行、全員戦死して聖旨

にお応えしたのであります。

ご報告の第二点はこの法要主催の特攻隊慰霊顕彰会が近く財団法人化される、特攻戦没者の慰霊顕彰事業を飛躍的に拡大強化するということであります。提案の本会会長瀬島龍三氏（陸士44期）発表されたとき、私どもは大変に喜び合いました。

特攻隊慰霊顕彰会は平成四年五月十一日ご逝去の会長竹田恒徳様をご先頭に靖国神社遊就館に特攻コーナーの開設や単行本「特別攻撃隊」の発行、陸海戦没特攻隊員合同慰霊祭の執行、全国特攻隊員慰霊祭への役員派遣など活発な活動を展開して参りました。

しかし、瀬島氏は会長就任時は末永き慰霊事業の存続を願うためには公益法人化以外に道はないと考えられ、そのことを決断されたのであります。

「特攻隊員が青春の身をもって決然体当たり攻撃を敢行、国に殉じられた尊い事実は、将来永遠に伝えてゆかねばない」これは瀬島先生のお言葉であります。

公益法人として国が認可した場合の慰霊顕彰事業としては追悼式、慰霊碑建立、史実の調査・研究、戦没者名簿、記録の作成、講演会、展示会の開催、機関誌とその他の出版物の発行などが、現在検討されております。この

公益法人の設立基金は三億円と言われます。

まことに全国的規模の事業計画であり、一種の国家事業とも言うべきものと考えられます。私ども特攻隊慰霊顕彰会会員は残る人生のすべてを投入して法人化への実現に努力する共に、認可後の事業完遂めざし全力を傾注する覚悟でございます。

ご報告の三項目は現在防衛庁が収集中の世界の識者の我が国特攻隊にたいする評価であります。米海軍提督、英国のジャーナリストをはじめ世界各国の指導者層が「われが耳を疑った」と驚きながらも「優秀民族国家日本のみが為し得る特攻作戦」と絶賛致しております。毎年本年次法要に参列のトルコ駐日大使館付海軍武官の式辞と全く同様であり、衷心よりの尊敬を込めた言葉が綴られております。いづれ防衛庁資料の発行があり次第、ご本山に奉納させて戴きます。以上、陸海特攻隊団体戦友一同を代表し、ご報告申しあげます。

在天の英霊安らかにお眠りを。

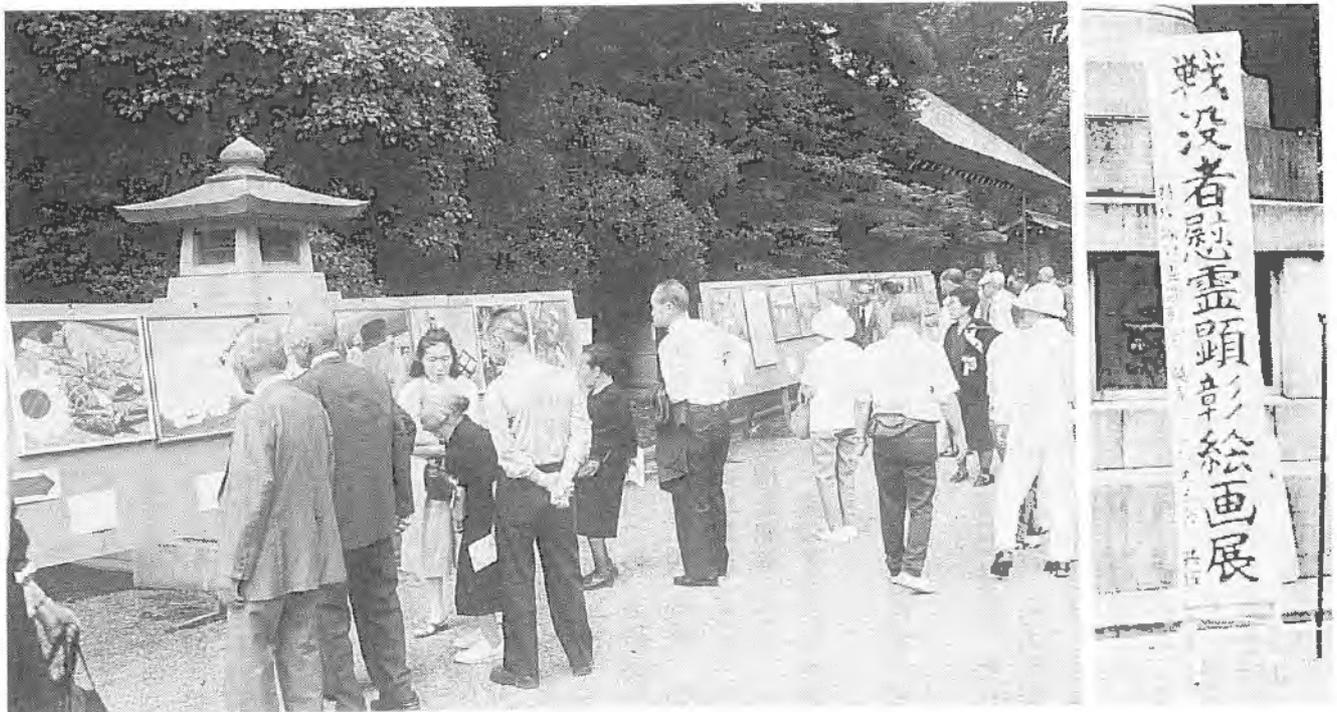
平成五年九月二十三日

元海軍第十六震洋隊

前任将校・海軍大尉 野崎慶三

# 8月15日の靖国神社

## 英霊にこたえる会の行事に協賛



戦没者追悼中央国民集会の盛況

英霊にこたえる会では毎年終戦の日  
に靖国神社で慰霊祭を行い、更に境内  
に建てた大天幕の中で日本を守る国民  
会議と共催し「戦没者追悼中央国民集  
会」を行っている。  
ところで昨年からこの会の要請を受  
けて我が特攻隊慰霊顕彰会の油絵同好  
者達は、当日御祭神に因む油絵を参道



に展示し参詣者に多大の感銘を与えて  
いる。本年の出品者は西野弘二、伊藤  
直之、松本武仁、中野友二郎、市川国  
雄の諸氏で、合計二〇点であった。な  
お東京裁判史観に基く戦後教育を受け  
た細川首相は、遺族や戦友の切なる要  
請を無視して参拝しなかった。

靖国神社で会おうと誓った戦友の御  
霊に、正午を期して黙禱を捧げる人々  
は、例年通り拝殿から神門までを埋め  
尽くしていた。

## 飛竜夜間雷撃隊

## (飛行第98戦隊)

新井省吾

(仙台乗員養成所四期)

赤々としたかがり火、頭上を美しい火の玉が飛ぶ、別府温泉での花火見物、何か楽しい気分だ、やがて陶然とするような早春の朝、遠く木陰をすかして地平線がほのぼのと明るくなってきた。

朦朧として静まり返った酔いしびれた心地、珍しいような気持ちで秒針が動いている航空時計に見入る、五時三十分、文字盤のガラスに太い傷が一本斜めについている、胸とひたいが痛む、ひたいに手をやると血がべっとりとついてくる！

一瞬恐怖感と痛みが五体をはしりぬける、夢、空想、現実、目の前で飛行機が燃えている、頭上に曳光弾が飛び交う、やがて明瞭になる意識、大分海軍基地、別府湾での夜間雷撃訓練、緊急出動命令、夜間編隊飛行、鹿屋基地着陸、魚雷懸吊！、真っ黒く光った実用頭部をつけた一、〇七〇疋の改七魚雷！、ここまで考えてきて愕然とする。

そうだった、俺は空中火災をおこして、片発になって炎上する飛行機をあやつりながら、飛行場南端の麦畑に不時着したんだっけ。

昭和二十年三月十八日、第五航空艦隊の指揮下にあった陸軍の飛行第九十八戦隊(陸軍重爆隊が海軍の連合艦隊の指揮下に入った異色の雷撃部隊)は、ウルシー拍地から北上して九州方面の攻撃に向かっていった空母十五隻を基幹として四群に分かれた、米第五十八機動部隊を迎え撃つため、五航艦隷下の、銀河、彗星、天山、陸攻、飛竜、等百五十六機の攻撃機と共に、〇四一〇鹿屋海軍基地を発進した。

あのとき・・・星のきれいな月のない夜だった。

暗夜の誘導路から、主滑走路へ最後の攻撃隊二機編隊二番機、最後の離陸だ、僚機が倒して行ったのか離陸目標の艦首灯が消えている、ママヨ！コンパス頼りに盲目離陸だ！エンジン全開だ、走る走る、どうやら、車輪の感触から滑走路の上らしい、燃料満載、一、〇七〇疋の改七魚雷を抱いた重い機体は、なかなか浮揚しない、

操縦桿を一杯引く、息詰まる瞬間、ようやく機体が静かに浮く、五体に感ずるたくましい上昇力、やがて鹿児島湾が灰色の板のようにみえてくる、編隊集合の為の長機からの発光信号がときれがちだ、ようやく長機が真っ黒い怪物のように見える距離までにつく、敵が近いので総ての灯火を消してしまおう、長機の暗夜に燃える青白い排気管の光をたよりに編隊を組んで航進を続ける。

発進点の都井岬付近まで来た時、突然長機が外側に急旋回する、見逃すまいと力一杯機体を傾けたが、長機の黒い影は闇の中に吞まれるように消えてしまふ。

反転して長機を求めて基地上空までひきかえすが、闇の空は広く長機らしい影は見あたらない。

基地の夜間照明設備を左翼下に旋回している時だった、高度七〇〇米、リズムカルな爆音をぬって突然ガン！ガン！ガン！と云う衝撃音と共に数十条の赤い火の棒が鋼鉄とガラスのキャビン破って、操縦席の頭上をながれる！瞬間敵夜間戦闘機に食いつかれた！と直感する、次の瞬間左発動機がパット火を吹き、操縦席まで明るくなる。

重くなった左翼を操縦桿で力一杯支

えながら方向舵を右一杯踏む、左発のブースト計を見るとゼロだ！完全に停止している。左発の火を消すため反射的に操縦桿を前に一杯押す、欧氏管が高度低下のためツーン！と痛い、高度七〇〇米から二〇〇米まで急降下、速度増加が効を奏してどうやら左発動機の火が消えた！ホッ！と一息つく間もなく、ダダ・・・左上から右下へ曳光弾の火が飛び第二撃を打ち込まれる、突然操縦席のキャビンが真っ赤に明るくなり、四番胴体タンクが火を吹く！、クソ！ヤッタナ！恐怖など感じない、片発の機の平衡を保つのと、次の処置と判断で一ぱいだ！、そのうちにもタンクの火は益々火勢を強めてくる、空中爆発！一瞬脳裏をかすめる！そうだ七人の搭乗員がいるのだ、空中分解したら全員助からない、何処でもいいから着陸しなければならぬ、だが、火は益々勢をまして後頭部が熱くなる、機外は夜の闇で、機内で燃えている火は、前方のキャビンを真っ赤にそめて外がみえない、全く盲目同然だ、高度は低下する、燃料タンクは何時爆発するかわからない、操縦桿を握っていても前方は何も見えない、こみあげてくる焦燥感、ママヨ！操縦桿を前にグッ！と押す、五体に感ずる機体の降下、前方は山か？断崖か？野

か？林か？フト高度計をみるとゼロ米だ！速度計は二〇〇キロを切っている！もう地面だ！左側の窓に鼻をすりつけのようにして見る、見えた！見えた！薄明のわずかな光にみどりの麦のうねがみえた！目測で高度約五米、ヨシ！これなら大丈夫助かる、操縦桿を一ぱい胸につくまで引く、地球が破れるような轟音！意識不明！・・・やがて正常な意識をとりもどしながら自分自身を見る、伝声管が引きちぎられたまま首にぶらさがっている、皮の飛行帽が額のところで斜めに切れて血ではりついている、飛行眼鏡は割れて後ろにとんでいる、血で赤鬼のような顔だったと後で仲間に聞いた。

胸が痛む両手両足はどうかうごく、麦畑の畝の小さな木によりかかっている、後方三十米付近で、愛機がまだ燃えている、弾倉にあった機関砲弾が火災の中から暴発して左右に飛び交っている。

オーイ！オーイ！とどこかで人の呼び声がかきこえる、そうだ！仲間の搭乗員はどうしたろうか、助けなければならぬ！、身体の節々が痛むのを我慢しながら飛行機に近づく、操縦席から発動機付近まで既に炎上して、胴体は真っ二つに折れている、ほかの仲間も果して助かったらうか？、火の燃える

音以外人声もしない。

その時、救助にかけつけた隊員に、オーイ！しっかりしろ！と抱きかかえられ、救助にきていたトラックに収容される、トラックの床には血が流れ、みんなやられている、飛行服は原形を止めぬ程焼き切れている者もいる。

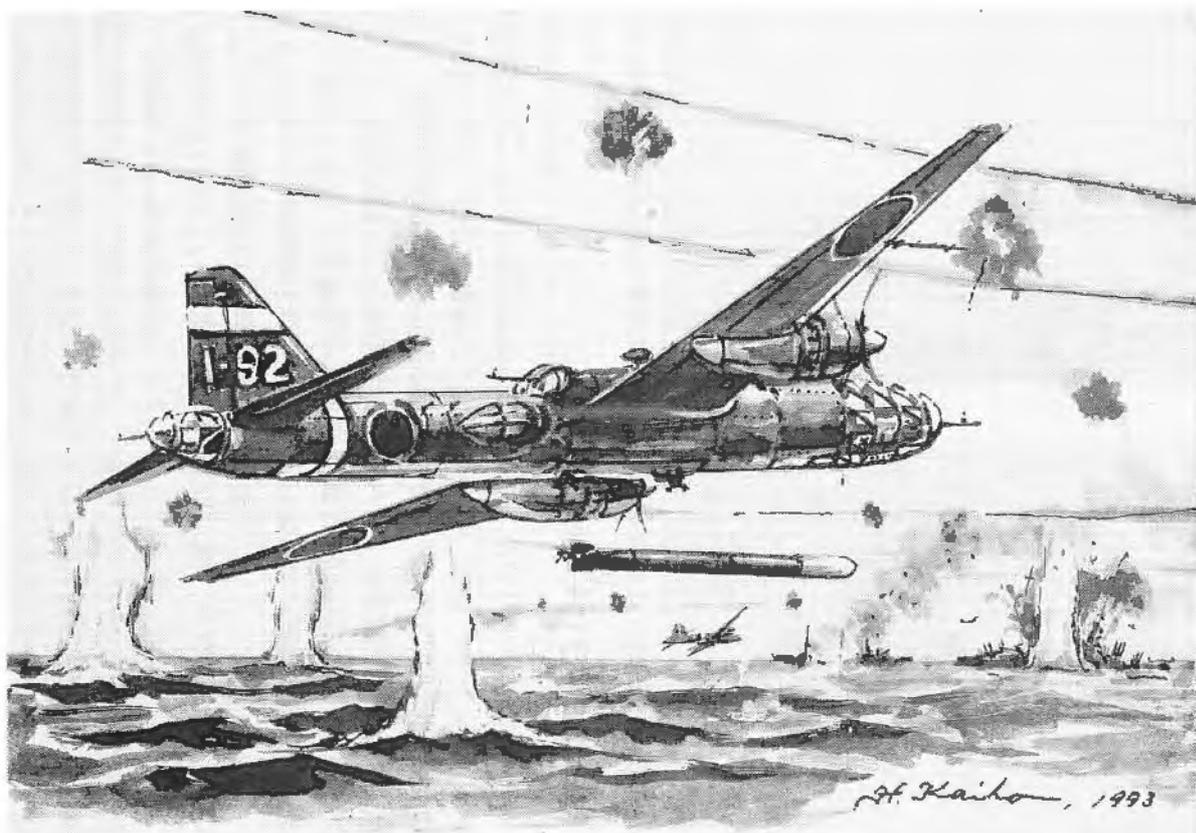
この結果、搭乗員七名中副操縦と偵察員は直撃弾を受けて機上で戦死、後上砲、機関係も直撃弾をうけて重傷、正操縦、無線、尾部砲は軽傷と云う損害を受けた。

このことが第五航空艦隊の作戦記録には「敵戦闘機は〇四二〇都井岬付近に出現、進撃途上の重爆一機と天山三機、激撃撃墜せらる」として記されている。

その後私は、大刀洗陸軍病院で療養に努め、五月十三日再び戦列に戻り沖縄海軍航空作戦に参加した八五六機とともに、連日連夜沖縄周辺の米艦船を狙い凄惨な攻撃が繰り返されたが、遂に沖縄の救援成らず、回天の機は空しく去ってしまった。

その後、大刀洗（福岡）、赤江（宮崎）、新川（島根）、小松（石川）、群山（朝鮮）、等に転進し、埼玉の児玉飛行場に於いて終戦を迎えた。

戦後平和な空が私たちの手に戻り、今でも時々小型機の操縦桿を握って、平和の尊さを噛みしめている。



飛行第98戦隊雷撃の図

# 特攻随想 (第三話)

理事 上坂 康

## 命令による特攻

第二次欧州大戦中の「バトル・オブ・ブリテン」(一九四〇年の英本土防空決戦)の際、ドイツ空軍の戦爆連合の大編隊を迎撃した英戦闘機隊は、体当りの特攻攻撃を敢行したのではないかと、という私の調査目的や質問内容は、英海軍武官マスタートンスミス大佐から英空軍武官マッグレガー大佐にあらかじめ通じられていた。

だから、私が平成五年六月二十九日、英国大使館で初めてお会いした Group Captain Alan N. Mac Gregor は、開口一番こう言われた。

『第二次世界大戦中の日本の「特攻作戦」というのは、命令されて敢行された捨身の攻撃であったと聞いている。「バトル・オブ・ブリテン」に際して、英空軍が英軍機に体当たり攻撃を実施せよという命令を出した事実はない。英国上空の英・独機の空中戦において Head-on Attack (体当たり攻撃) はあったが、それは自発的なものは偶発的なものであり、その大部分のパイロットは脱出・生還している

し、いわゆる Suicide Attack (自爆攻撃) ではなかった。だから「バトル・オブ・ブリテン」においては、あなたが日本人が考えておられるような「特攻」攻撃はなかったというべきでしょう。』

## 英本土上空の死闘

マッグレガー空軍大佐はさらに語を続けて、次のような説明をして下さった。

一九四〇年五月の仏ダンケルクから英本国へのいわゆる「地獄の撤退」と六月のフランスの降伏に引き続き、七月からドイツ空軍が開始した英本土空襲は、英本国侵攻の前提となる制空権奪

取をねらったものだっただけに、大規模かつ徹底的であり、これを迎撃する英空軍戦闘機隊との間に、壮絶きわまる死闘が繰りひろげられたのであった。一つの戦場で双方百機程度が、入り乱れて空中戦を行なうことは珍しくなかった。ドイツ爆撃機隊は、搭載機銃の死角がないように緊縮隊形を組むのが通常であり、護衛の戦闘機を振り切ってこれら爆撃機編隊を攻撃する英戦闘機は、肉迫戦闘を繰り返す結果、接触・衝突も起き、中には帰還した英戦闘機の機体に、ドイツ機搭乗員の肉片や血こんが付着していることすらあったほどである。

まさに英本土防空決戦の勝敗は、こ

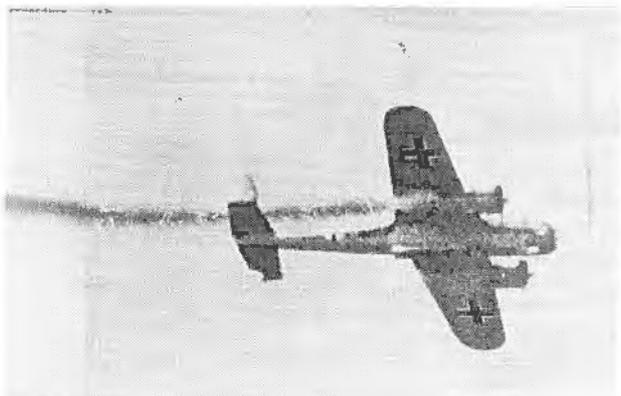
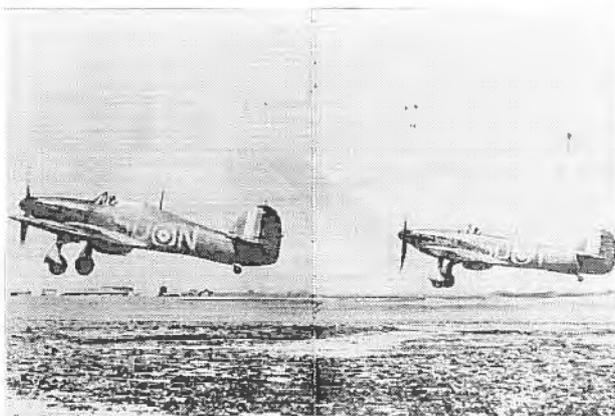
れら空中戦の帰すういかんにかかってきた。この防空戦の従事者について、チャーチル英首相が「今ほど英国の命運が、このように限られた人たちにかかっていることはかつてなかった」と議会で語ったのはこのころのことであった。

この激烈な戦闘に伴い、航空機と搭乗員の損失ははなはだしかったので、パイロットの脱出・生還が強調されていた。それだけに、英空軍が「体当たり攻撃」を命じるようなことはありえなかったのである。

## ハリケーンの体当たり攻撃

マッグレガー空軍大佐が挙げられた

熾烈なる防空戦闘



①次々と離陸して行くハリケーン戦闘機  
②要撃奏効 煙を吐くトルニエ爆撃機

英戦闘機の「ヘッドオン・アタック」の実例は次のとおりであった。

昭和十五(一九四〇)年九月十五日に「バトル・オブ・ブリテン」における最大の空中戦が行なわれた。独空軍延べ一九一七機(うち損失五六機)と、英空軍延べ約七百機(うち損失二五機)が激突したのである。

この日十二時十一分、ロンドンのChelsea 上空において、英空軍第五〇四飛行隊のハリケーン戦闘機パイロットRay Holmes 軍曹が、独空軍のドルニエ(DO一七)爆撃機に体当たりを敢行したのであった。ハリケーンは、英スピッドファイアよりも旧式で性能も劣ったが、機数の上では主力として大いに活躍した単座戦闘機であった。また、Dornier は、性能上種々問題はあったが、当時、多用された第一線爆撃機であった。

数次の攻撃で弾薬を使い果たしたと知ったホルムス軍曹は、とっさに眼前のドルニエ爆撃機を体当たりで撃墜しようとして、そのまま敵機に「ボディ(突入)した。ハリケーンの左翼端を爆撃機の左尾翼に衝突させると、その尾部が折れてドルニエはきりもみ状態になって墜落した。軍曹は幸運にもパラシュートで脱出して無傷で生還した。

このような英戦闘機の「ヘッドオン

・アタック」の例は他にもあったが、特にホルムス軍曹のことが有名になったのは、それが昼間ロンドン上空で起きて、よく目撃されていたからであると言える。軍曹が体当たりしたドルニエがきりもみ墜落の途中に、その弾倉からこぼれた爆弾は、バッキンガム宮殿の屋根に落ちたが不発であった。もし軍曹が墜落させていなかったら、宮殿にはもっと被害があったかもしれない。だから軍曹は、この体当たりによってバッキンガム宮殿を救った英雄ということになり一躍有名になった。

### 英軍は特攻をしない

戦闘機の体当たり攻撃の例は日本にもあったし、ドイツにもソビエトにもあったらしい。日本機の場合は「自爆攻撃」が多かったようである。しかし外国では、体当たりしたパイロットの脱出・生還した例が多く、それらはおよそ「特攻」というべきものではなかった。

「バトル・オブ・ブリテン」における英戦闘機の体当たり攻撃が「特攻」ではなかったということを、実は私は英国武官に尋ねる以前に既に知っていた。平成五年五月十八日、世田谷特攻平和観音の月次法要の際、鈴木瞭五郎副会長と英軍機の体当たり攻撃の話をしたの

ち、これを本誌のテーマとして採り上げるため、私は英国海軍武官に照会の電話をした。ところが同武官は不在であったので、補佐官のJ.Dewberry 准尉に用件の伝達を依頼した。

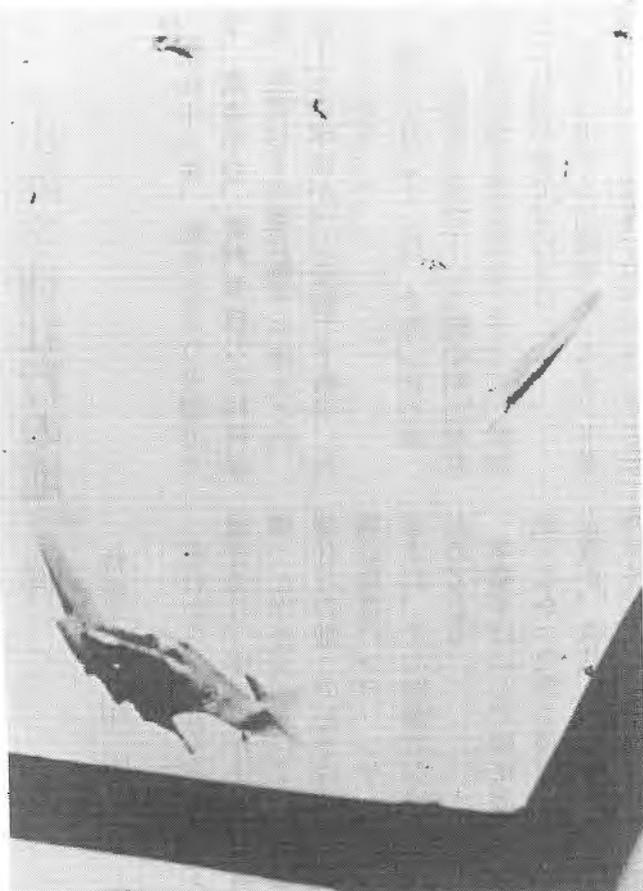
この准尉ともかねてから懇意であるが、彼は私の用件を武官に取り次ぐことはあっても自分の意見を言わないのが普通である。そのデューベリイ准尉が、この時ばかりは即座に「英軍は特攻作戦をしない」と言った。私が「絶対にか？」と確認したら「絶対にしな」と自信をもって答えた。この准尉のことは、私の耳に「特攻作戦などをしないのが英軍の誇りである」と

言っているように響いた。

### 体当たりが原則

平成五年十月八日から十九日まで、ハワイ大学の講師で戦史研究仲間のJohn DeVirgilio 氏が来日した。早速この戦闘機の体当たり攻撃について意見を求めたら彼はこう言った。「米軍でも、自機の弾薬を使い果たして、なお敵機が在空中する場合、その戦闘機は敵機を ram (体当たり) で撃墜せよと教えているようである。英空軍でもそれが principle (原則) になっているに違いない。」

さらにデヴァジリオ氏はこんな話を



左翼をもぎ取られた英戦闘機 跳出して落下傘が開きかけているパイロットが上方に見える

した。キリスト教では自殺を禁じている。だから、状況によって個人が自決することはあっても、軍が軍人に suicide Attack (自殺攻撃) を命じることはありえない。自決しなければならぬような状態に陥ったら、降伏すればよいのである。仏教やイスラム教では、他のために自己を滅し犠牲にすることは美徳とされている。このような宗教思想の相違から、日本人は特攻ができるのではあるまいか。しかしわれわれは、いかなる大義があろうとも、非人道的な自殺攻撃を強要されることはないし、そこまでやることはないと考えている。

おわりに

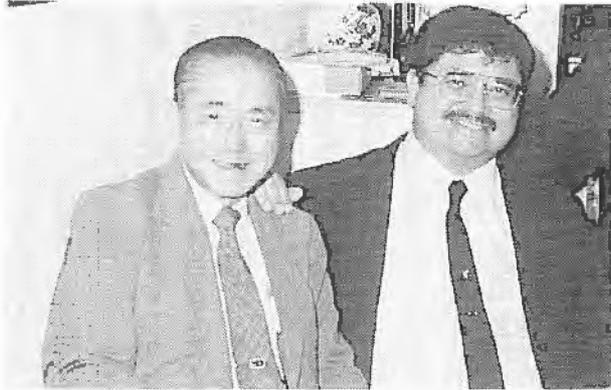
このデヴァジリオ氏の「そこまでやることはない」ということは、どこかで聞いたことがある。そうだ。「特攻随想第一話」で語ったとおり、海上自衛隊幹部候補生学校の候補生たちが言っていたことばである。彼らは誰から教えられたのか知らないが、このアメリカ人と同じことばを口にしていたのである。戦後のアメリカナイズされた風潮が、現代の日本人の思考をこのように変えたのであろうか。

さもあらばあれ、日本人がああいざという秋に特攻作戦を敢行できたこと

が、われわれの誇りであると私は今でも思っているのである。

(隊友会東京都支部連合会副会長)

マツグレガー 英空軍大佐



John DeVirgilio 氏 (右) と筆者 (5.10.9 東京にて)

「出陣学徒壮行の地」碑

特操三期 和田 實

昭和十八年、勅令により全国の大学、高等学校、専門学校、専門学校の文科系学生、生徒はその徴兵猶予が停止され、約十万人の学徒がペンを捨てて戦場に赴くこととなった。

同年十月二十一日、その「壮行会」が、文部省主催の下に当時の明治神宮外苑競技場で東京周辺七十七校が参加して秋雨の中で挙行された。

分列行進する出陣学徒、スタンドを埋めつくした後輩、女子学生、その絵巻は、ラジオ新聞、ニュース映画によって実況放送されたのである。

それから丁度五十年が風雪とともに過ぎ去り、平成五年十月二十日、生き残った学徒兵の手によって、「出陣学徒壮行の地」の記念碑が思い出の競技場の現在のマラソンゲートの左側に建立され、その除幕式が盛大に挙行されたのである。

学業半ばにして陸に海に空に往って還らなかつた友を偲び、生き残った学友達が、次代の若き世代の人々にこの事実を伝えて、永遠の平和を祈念するためである。



特集

# 南九州航空碑 ①

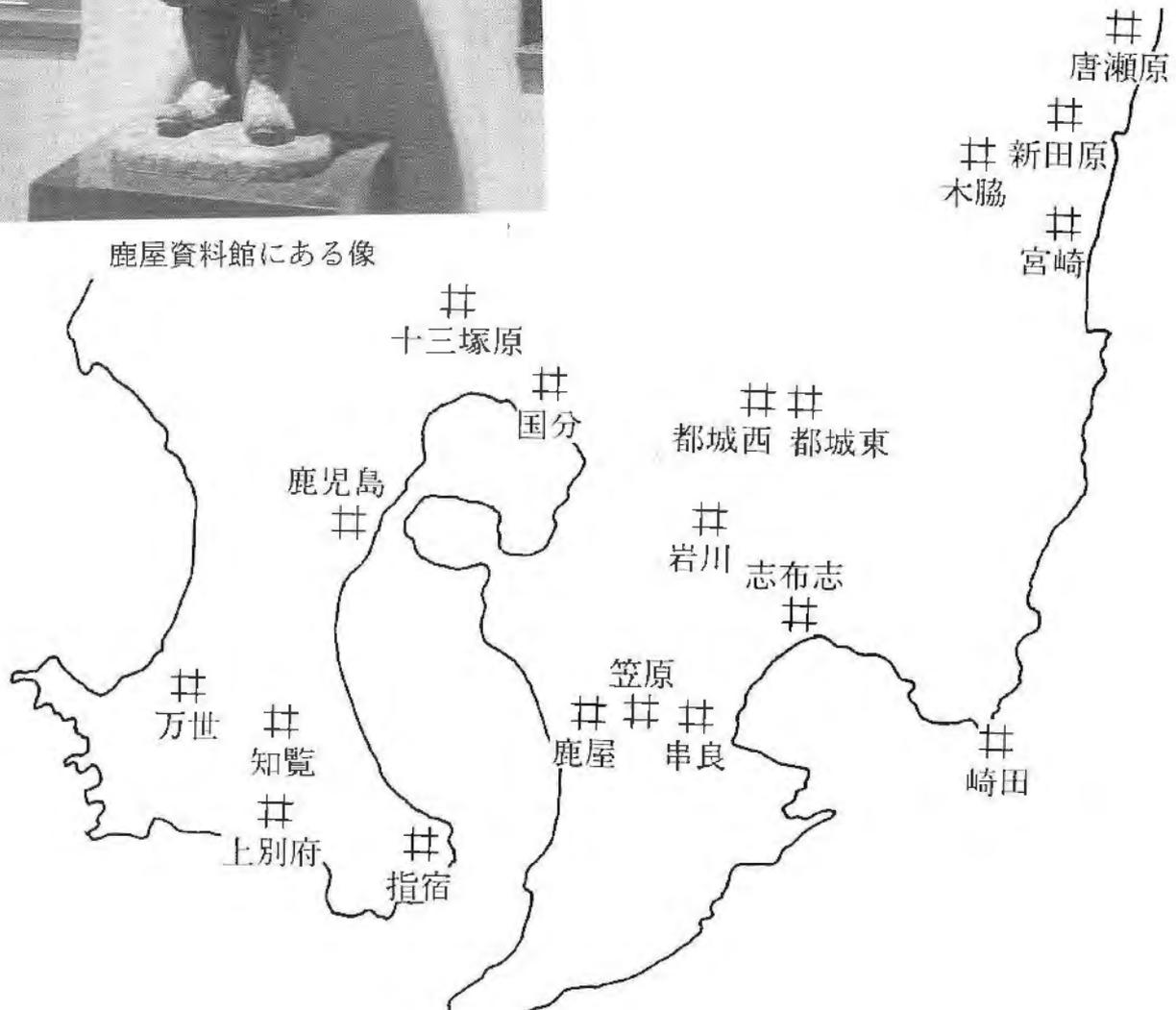


鹿屋資料館にある像

沖繩作戦において空の第一線は南九州の陸海軍航空基地だった。沖繩の航空戦の主体は特攻だったので、それらの基地の大半は特攻基地として使われ、特攻にまつはる碑が建っている。碑だけでなく資料館の設置されている処もあり、往時の関係者が世を去った後に於ても、特攻という史実を後世に語りかけてくれるであろう。

ここに碑及び顕彰施設を紹介し併せて恒例的に行はれている行事についても付記するが、調査の不備で洩れがあるかも知れない。お気付の点あれば御指摘頂き次号に追加掲載致し度い。

戦争末期南九州にあつた陸海軍飛行場



## 鹿屋特攻戦没者慰霊塔

鹿屋基地は海軍の沖繩作戦における中核基地となり、昭和20年2月第五航空艦隊司令部が置かれた。昭和19年7月には空地分離で基地は九州空の管轄するところとなっていた。

この基地から昭和20年3月11日、菊水部隊特攻隊（銀河13）が西カロリン諸島ウルシー泊地の米機動部隊攻撃に突入したのを嚆矢に、3月18日には菊水部隊銀河隊の主力が米機動部隊の特攻に出撃していった。その後天一号作戦間、神雷部隊の桜花特攻部隊（桜花、陸攻、零戦）と爆戦隊、そして各地からこの基地に集結して出撃した爆戦隊の神剣隊（大村空）、筑波隊（筑波空）、七生隊（元山空）、昭和隊（谷田部空）のほか、菊水部隊の天山隊、白菊隊と徳島空の白菊隊等がこの基地で戦備を整え、米機動部隊或は沖繩周辺艦船攻撃に出撃していった。合計67隊、四四七機、七五五名の散華を記録している。



境内に掲げられている建立由来記抜粋

「あたら青春に富む尊い生命を、祖国のため敢然と捧げたこれら若人達……世情ともすれば敗戦のかけにこのような尊い犠牲を忘れがちである。こんにち、この結果はどうであったにしても、これら身を挺して祖国の難に殉じた人々の祖国愛は賞賛されるべきであり、これら若人の至誠至純の精神は、御霊とともにとこしえに祭られ史実とともに後世に誤なく伝えられなければならない」

「その御霊を祭る慰霊塔を建立すべく、昭和三十一年十月鹿屋市長を会長とする「旧鹿屋航空基地特攻隊戦没者慰霊塔建立期成会」が結成され、全国に協力を呼びかけたところ、市内はもとより、ひろく各方面から多くの浄財が寄せられた。これに基きその神霊をとこしえに祭る慰霊碑を、昭和三十三年三月二日建立した」

鹿屋市

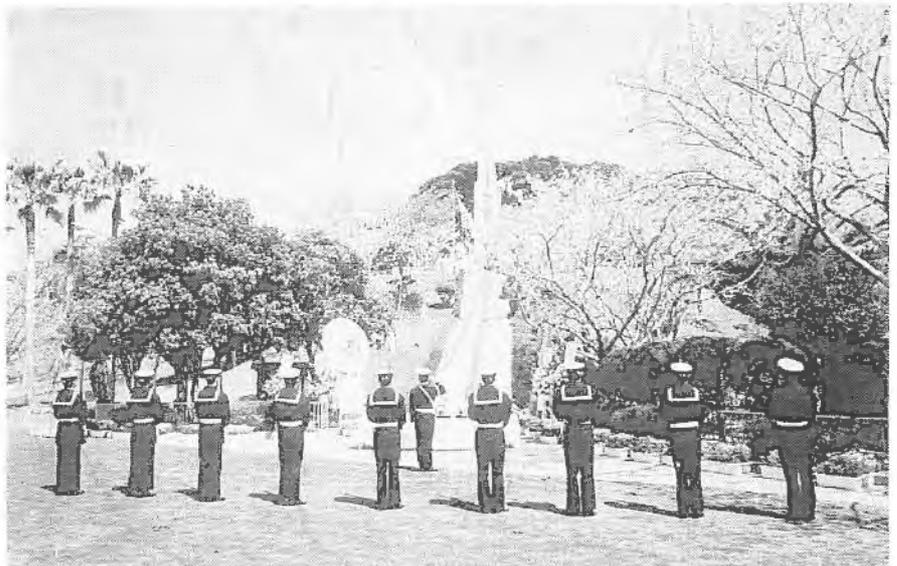
### 旧鹿屋航空基地

#### 特攻隊戦没者追悼式

例年4月10日前後に市長が祭主となつて行はれている。

平成五年四月九日に行はれた追悼式における蒲牟田喜之助市長の捧げた追悼文の一節

「往時のあなた方の心情を思いますとき、ただ痛悼極りなく胸がいたみます。今、御霊前に立ち「今日もまた黒潮おどる海洋に飛び立ち行きし友はかえらじ」の碑文を読みかえすとき、



追悼式における海上自衛隊の儀仗

あるいは航空史料館に展示されている幾多の遺影、遺書、遺品を拝見するとき、往時のあなた方の心情に思いをはせ、ただただ感涙にむせび頭が下ります」

「鹿屋市はその後大隅の中核都市として順調な市勢の意展をとげつつございます。これらの発展もひとえに祖国のため尊い生命を捧げられましたたたまたまの、限りないご加護の賜物と固く信じて疑いません」

# 祝鹿屋航空基地史料館落成記念

7月24日  
落成開館



遺影と遺品  
復元された零戦(館  
内に展示されてい  
る)

海上自衛隊鹿屋基地内の資料館には  
同基地にまつわる海軍航空特攻の貴重  
な資料多数が展示されていることは、  
既刊の書物「特別攻撃隊」で紹介した  
通りであるが、その建物は昔の海軍工  
廠の跡で老朽甚しかったので、この度  
基地の構外に新築された。新資料館は  
床面積二四九四平米、鉄筋コンクリー  
ト二階建の立派なものである。  
この資料は特攻隊だけのものではな  
く、一階は海上自衛隊航空部隊に係る  
もの、二階が旧海軍特に海軍航空にち  
なむものが展示されており、その中に  
特攻作戦コーナーがある。  
特攻作戦コーナーには遺書六〇点、  
遺影三九三点等が展示されている。



# 神雷部隊の碑



鹿屋市郊外の野里村（現在は鹿屋市）の小学校は神雷部隊の宿舎になっていた。この地に嘗ての隊員小城久作氏と報道班員山岡壮八氏が「桜花」の碑を建てた。

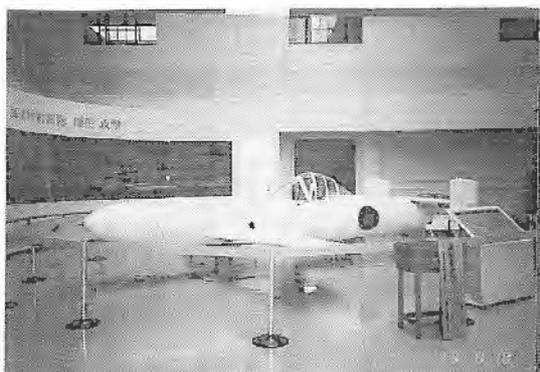
昭和19年10月神雷部隊として七二一空が神ノ池基地（茨城県鹿島郡神栖町）で編成され訓練を開始した。20年3月21日日本土南方海面の空母六隻より成る敵機動部隊に対し、神雷部隊は桜花15、陸攻18、零戦10をもって出撃したが、敵戦闘機の迎撃を受け、到着前に全滅の悲運に遭った。以後天一号航空決戦の間桜花攻撃に出撃すること10回に及ぶ一方、爆戦特攻隊建武隊を編成し、その出撃11回を数え、部員四七〇名余が多大な戦果を挙げた。

## 鹿屋資料館展示



桜花を抱て出撃する一式陸攻

少飛会海法秀一画

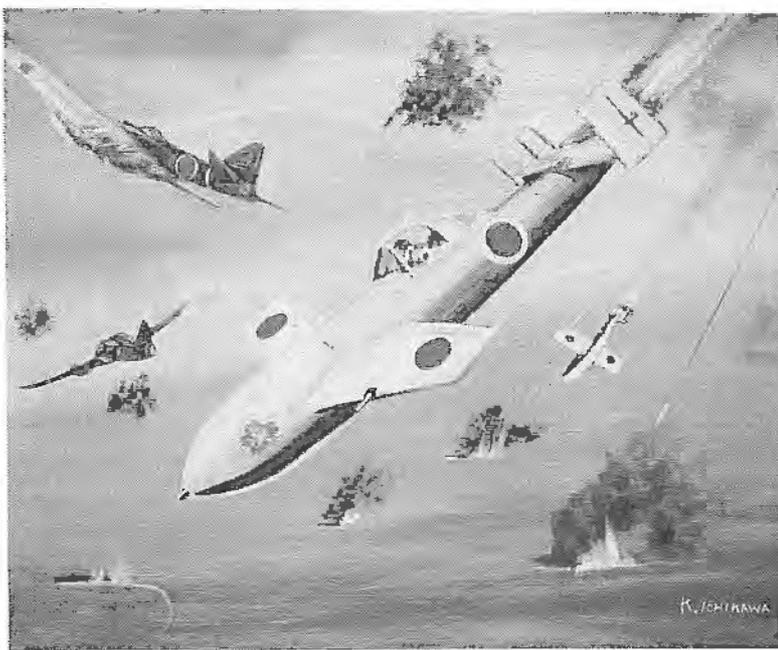


靖国神社遊就館展示

桜花は人間操縦のロケット推進滑空爆弾である。総重量2.14噸、爆薬1.2噸、これを一式陸攻に懸吊して進攻し、切放して敵艦に体当たりする。

## 桜花突入

会員 市川 国雄 画



## 七隻を撃沈 特攻隊・神雷部隊出撃

【前線某基地】にて宮本 義典班員（本誌記者採訪）の報告によると、神雷部隊は敵機動部隊の空母六隻を撃沈し、七隻の空母を撃沈した。この功績は、神雷部隊の勇気と犠牲の精神を示している。また、この功績は、神雷部隊の勇気と犠牲の精神を示している。また、この功績は、神雷部隊の勇気と犠牲の精神を示している。

# 串良特攻基地碑

平和公園（掲示板の要約）

この公園一帯は旧海軍の航空隊があったところです。昭和二十年三月一日からは特別攻撃隊の基地となり、終戦までの半年間に祖国の安泰を祈り南の大空へ勇躍飛立ち、散っていった若き精鋭たち三百五十九名の最後の地となりました。

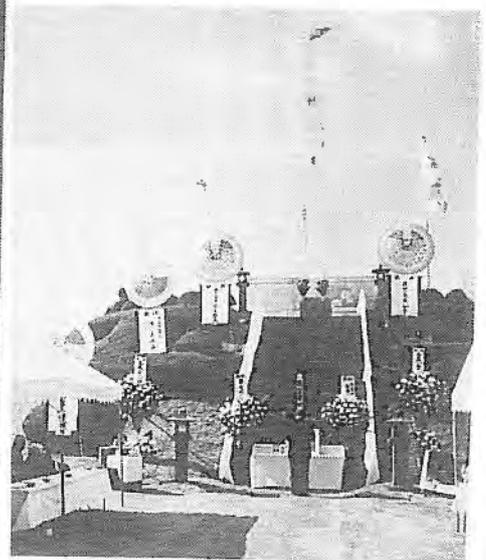
昭和四十四年十月一日、串良町及び旧串良海軍航空隊基地出撃戦没者慰霊塔建設期成会が中心となり、平和の礎石と名づけられた英霊の慰霊塔を建立し人類恒久平和を願い平和公園と命名され、以来毎年十月十五日には全国各地から遺族や生存者が集り、町民と共に慰霊祭が行はれております。

慰霊橋のうえで慰霊塔に向い柏手を打つと、塔の上の白鳩がグツグツと鳴きます。東西一三〇〇m、南北二二〇〇mの滑走路の両脇には二千本の桜が植えられ、本土の桜前線はここから始まります。公園内総数三千本余りの桜は、春にはその花で公園内を埋めつくす程になり、大隅半島の桜の名所になっております。

串良町



## 町主催の慰霊祭



## 海上自衛隊の儀仗

平成四年十月十五日に行はれた慰霊祭に中島孝町長の捧げた祭文の一節。

諸賢は太平洋戦争末期、大命を奉じ御国のためと生氣潑刺若い前途有為な紅顔の身をもってなんの疑念をいだかずただひたすら祖国の安泰と繁栄のみを信じ殉じられたのであります。二度と踏むことのなかつたこの串良海軍航空隊基地の滑走路の跡は今も諸賢が無事の帰還を待つかのようにその跡をとどめております。

“今や我国は世界に冠たる経済大国として国際社会に伍して平和の維持、文明の進歩に寄与し年を追って隆盛の喜を加えつつありますがこの喜を尊霊に分たち得ないことは返す返すも残念に存じます”

“私達は尊霊の心を心とし御遺族の援護に努め世界恒久の平和と人類の福祉向上に貢献することが私共に与えられた責務であり尊霊の御意志にむくいる唯一の道であると信じその誠を尽したいと存じます。更に私達は尊霊の偉業を後世に伝え明るい豊かな郷土を築きあげるためより一層の努力することをお誓い申し上げます”

# 知覧特攻平和観音



## 知覧特攻観音竝に 慰霊顕彰施設の由来

この地は沖縄戦における陸軍航空の特攻基地として、約千名の特攻隊員が出撃したところである。これら特攻隊員の御霊の安らかなることを祈念し、関係将士の浄財によって作られた観音像を、町民の手によって作られた観音堂に奉安した。堂宇ができたのは昭和30年9月である。



その後この地域には特攻隊員の遺徳を顕彰する各種の碑や像及び特攻平和会館と呼ぶ記念館が作られ、参拝者は跡を断たない。現在の会館は昭和61年12月に建設されたものである。

## 慰霊祭

知覧特攻慰霊顕彰会主催の慰霊祭は毎年5月3日に行われ、回を重ねること三十九回に及んだ。毎年全国各地から多くの参列者が集り、本年は千二百名だった。

会長である東敏見知覧町長の捧げた「追悼文」の要点は次の通りである。

“……ここに謹んで戦没者一、〇二六柱の御霊のみに追悼の誠を捧げます。顧みますと世界戦史に類をみない特攻作戦がとられ、あの清純無垢な若者たちが万に一つの生還も期せず、ひたすら祖国の必勝と後に続くもののあるを信じつつ、雲流るる大空の果てに散華されたのであります。そのうら若い生命を祖国愛と同胞の安泰を念じつつ敢然と死地についた御霊の心中を察するときまことに涙を禁ずることができません……”



“私達は御霊の想出多いこの地に特攻平和観音堂を中心にありし日の勇姿を銅像に偲び、血涙の手記をはじめ数多くの遺品を平和会館にお預りし保存展示に努めております……”

また本年三月には、特攻隊員が出撃前に「月光」の曲を弾いて知覧基地を飛び立ったという、そのゆかりのピアノを、佐賀県鳥栖市の御好意により平和会館へ借受け展示できました……”



### 特攻平和会館

館内には遺書、遺品、遺影等約4,000点が展示してあり、平成4年度参観者数は59万余人であった。

施設  
全  
域



当時のものを復元



町外れから観音堂に至る間の参道両側には、全国各地から寄進された石灯笼が並び、その数七二〇基に及ぶ。



帰るなき機をあやつりて征きしはや開闢の母よなほなほなほと

# 知覧特攻観音慰霊祭に参列して

## — 極東軍事裁判史観の克服 —

阿部 恵 久 (陸士60期)

知覧詣で

国内戦を、そこでだけ戦い抜いた沖繩  
健児の塔に、ひめゆりの塔に

地下壕に、岩窟に  
香を手向けなければ死ねない  
と、思っていた

その思いはとげた。

5月3日

九州・知覧の特攻慰霊祭に参加する

「祖国の明日」のために

若き命捧げたみ霊たち

その献身にふさわしくない

「今日の祖国」

むざむざ生きて、何も出来ないおれ

詫びに行く

ひたすら詫びに行く

参拝の人混みの中で

君がため、国のため

男は、戦で死ぬるもの

と、決めていた

25歳までは生きていない

と思っていた

66歳の5月3日

知覧特攻慰霊祭に参列した  
お詣りされるはずのおれが

お詣りしている

参拝の人混みの中にあつて

深い森の中を歩いているように

耳の奥がシンシン鳴る

逆光の中に

フェリーの甲板に立っている

錦江湾に波はない

「わが胸の燃ゆる想いにくらぶれば

煙はうすし桜島山——平野国臣」

逆光の中にそそり立つ桜島

噴煙はうすく、茜色の空を

落日に向かって流れていく

特攻観音堂の裏手

杉林の中の三角兵舎

半地下式の壕内はつめたく湿って

足もとがすべる、心がゆらぐ

米軍機の目を避けて

出撃の前の数日を、生還のない数日を

この狭い壕舎で過ごした

遺書をしたためた

「ぼくたちが今、死ななければ

祖国の明日が無いのです」

潔く、青春を捧げつくしたあなたがた

その散華はいま、報いられているか！

その燃ゆる思いはいま、

受け継がれているか！

その「祖国の明日」の茜色の空を

噴煙はうすく

落日に向かって流れていく

この、体の底のほうから

燃ゆる思いが噴き上げてくる

沖繩につづく桜島の空は

昏れようとして昏れない

涙を流してくれて、ありがとう

特攻平和会館の中の、すぐ前の席で

目の涙ふいている十七、八歳の青年

いちばん前列の右でも

三十過ぎの男が目をつぶった

戦争を知らないのに

特攻の英霊の話に

涙を流してくれてありがとう

「ぼくたちが、いま死ななければ

祖国の明日が無いのです」

その祖国で、テレビは今も

侵略戦争だった、侵略戦争だった

とはやし立てている

ヒロシマ・ナガサキ、非戦闘員の

大量殺戮は起訴されたか！

ベリヤ抑留の強制労働・餓死・

凍死は断罪されたか！

今やテレビは

「国際人になるために『国家』などと

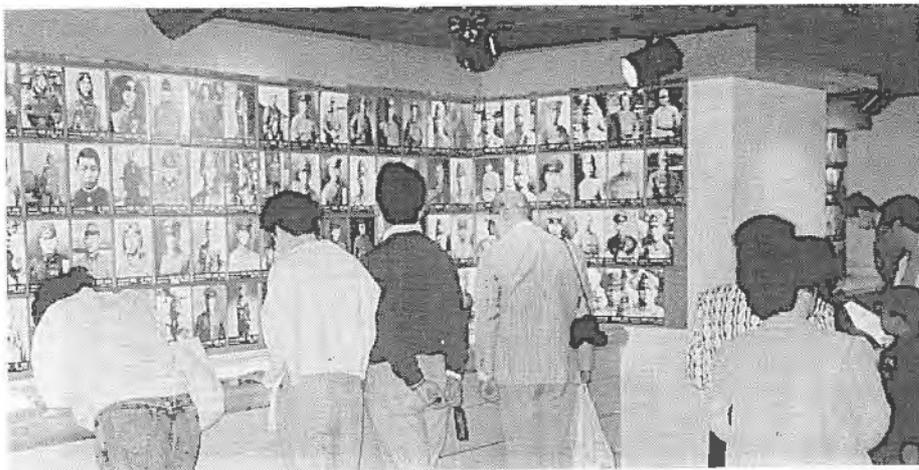
言っではいけない」

と、きめつけているのに

涙を流してくれてありがとう

祖国のための

この散華に！！



遺書に見入る若い人

# 知覧随想

今枝 重和(陸士 61期)

5月初旬、知覧に立つ。昨日来の雨今はやみ、風冷やかに頬をうつ。開聞岳、頂の雲はなるる時、死出の道遙か沖繩に続く。過ぎて48年、月日遠くへだつとも、その悲惨、無惨、無念を偲べば、唯伏し、拜し、涙するのみ。

追悼碑の某將軍、如何に美辞麗句を飾ろうとも、位階勲等、かつての地位を刻して対する心情、凡夫よくそれを解する能わず。虚空をにらみ、征きし若者の霊よあわれ。齡未だ「成人」に至らず、技「戦力」にも満たざる若人を、効無き「必死の道」に投じながらも、その死が、戦後の平和と繁栄の基礎なりとするは、死者へのはなむけにあらずして、死を強いた者達の責任回避の遁辞、民族への背徳の言というべし。敢えて言わん。徒らに美化するを止めよ。死は常に惨、酷、醜なり。

ひるがえって、おもい内に向けるとき、かつての股肱、その嗽声腐骨に満つるも、即位後、靖國神社参拜の儀の一度だになきはし。天に訴え、地を叩くことすらもなさず、「天皇の為」、帝

国存続の為、民族の滅亡するを恐れ、それを非命と歎ぜしか、運命と諦めしか、はたまた命令と甘受せしかは知らず、唯、「今は命なり」と、開聞岳、頂の雲はなるる時、碧青の道一筋、黙々と消え去りし、夢多き青春の群像への背信にあらずや。

儂きや、民草は露の命。また「戦後は余生なり」とうそぶく徒輩をみるにつけ、その傲岸而不遜、死者へのいたわりもなき心根に、深い悲しみを覚ゆ。感ぜざるや、死者と生者、その間によこたわる、終生超え得ざる溝の深さ、闇さ、冷やかさを。父を知らず、父死す歳になりし娘、一人沖繩の海にひたりて泣きしとか。「お父さん、つめたかったでしょう」

開聞岳、頂の雲はなるる時、空の色青さを深め、人の哀しみのいや増せし日々、既に遠し。信じ愛するもののため、既に身を賭けし、切なくも美しき若者達の魂魄、今奈辺にありや。眠れやすらかに、たとえこの因果つるとも、落日よ、碑銘をてらせ、征き逝きてかえらざりし汝が名 永久に伝えん。

合 掌

# 会員から寄せられた歌

山形市在住の工藤鉄太郎殿からの次の歌詞と譜面、それを吹込んだテープが送られてきた。南海支隊に属しニューギニアで戦死した東山信彦主計中尉(京大法科卒)を偲んで作ったと言はれるが、特攻隊員に捧げる気持ちにも通ずるものがあると思ひ、ここに掲げる

祈る

祖国を遙か 流れ星  
光輝めく 一すじに  
若き命を 先駆けて  
戦野に果てた潔きよさ  
無駄死だと云はれよと  
お国の為身を捨てた  
いつか芽を吹く花桜  
匂い豊かな 国の花  
今宵みんな飲む酒は  
花の香りの味がする  
九段に眠る亡き友よ  
泣くなおもかげ盃に

歌おう君が代諸共に  
樹てよう日の丸高々と  
久遠の願い 国民が  
生命をかけた日本国

平成6年度

# 会報の編集に

ついて

我が会が公益法人になったこの際、活動を更に積極的にする為、従来一回発行していた会報を年四回を目標に努力したいと思ひます。毎号の頁数は郵送料を低く抑える為、従来同様24頁と致します。従って記事の分量としては本号位となります。

今回は「特集・南九州航空碑」と銘打ってみました。地元市町村が主催しているものとして、これ以外に万世、十三塚原、国分、川南(宮崎県)などがあり、資料は整っていませんが頁数に余裕がなく、次号まわしとしました。

それ以外の記事も含めて次号を満杯にするだけの資料の手持がありますので、来春三月には19号を発行いたしたいと思ひます。但し手持資料というのは航空と空挺だけですので、水上特攻、水中特攻については是非後世に伝えておき度いと思う記事の投稿をお願いします。

編集担当 田中賢一

都城特攻基地の碑

都城特攻振武隊

は や て



副碑に刻んである特攻隊員氏名

部隊名、氏名、突入年月日、年齢が刻んであるが突入年月日を省略し、年齢は算用数字を使い書き流しとする。

〈第一特別振武隊〉林 弘20、田中二也24、友枝幹太郎23、林 玄郎25、浜谷利一22、丹谷毅21、石賀兵一20、上津一紀20、伊藤二郎26、齋藤信雄20、

〈第六一振武隊〉岡本勇20、若杉潤二郎24、請川房夫18、田中英男20、長谷川三郎19、香川俊一18、篠原穂津美18、橋本初由23、冲山富士雄18、山本隆幸19、新井武夫19、〈第六〇振武隊〉平柳芳郎21、柴田治22、田中治20、永田利夫19、吉永成明19、若杉正喜19、倉元利雄20、荒正彦18、堀元宮一18、向井忠19、〈第五七振武隊〉伊藤喜得21、戸沢吾郎22、唐沢鉄次郎24、吉川富治24、小林昭二18、志水一18、高整徳19、西田久18、山下孝之19。

慰霊碑建立の由来 (碑文)

昭和二十年四月、日本の命運をかけた沖繩攻防戦は凄惨熾烈をきわめた。南九州の陸海軍航空基地からは、爆弾と片道燃料だけを積み込んだ特別攻撃機が、日夜続々と出撃していた。

当時、市の郊外にも東・西両飛行場があり、同年四月この基地から初めて四式戦「疾風」特別攻撃機が沖繩周辺

の目標めざして南の空へ飛び立って行った。以来七月一日までに十七次及び出撃が行はれ、未だ少年の面影を残す二十歳前後の若い特別攻撃隊員は、戦局の好転と祖国の勝利を信じて南海の果てに散華したのである。

戦後三十三年の歳月と変容によって思出の基地一帯は当時の面影をしのぶよすがもない。時あたかも三十三回忌を迎えるに至って、隊員の遺族や各方

面に慰霊碑建立の気運が高まり、本年六月市長を会長とする奉賛会が結成された。幸にひろく内外から多額の寄付が寄せられ、ここに永久平和の願をこめて、特別攻撃隊員並に基地にまつわる殉国の士の英霊を合祀するものである。

昭和五十二年十一月十五日

都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会

慰霊祭は毎年4月6日に市(奉賛会会長は市長)が主催して行はれる。祭文 奏上岩橋市長



平成五年の慰霊祭における祭主の捧げた祭文の一節。

「僅か二十年前後の人生を敗色濃い戦局の劣勢を一挙に挽回すべく最後の勝利を念じひたすら祖国の興隆と国民の安泰のためと信じつつ大海原に散っていかれた特別攻撃隊の諸士を思うとき今更のように哀痛の思い胸に迫るものがあります」

「たとえ時は移り世代は変わりましたが祖国の危急に際し一命を国に捧げられました諸士の愛国の至情は永く後世に伝えなければなりません」

## 特攻隊員の手記

《前号に引続き「少年飛行兵第十三期生の歩み」より転載します》

### 四十年前の特攻を顧みて

振武第64隊国華隊 鈴木祥文（旧川原文治）

昭和十九年十月下旬、教官であった岩本益臣大尉以下十二名が陸軍で初めて特別攻撃隊に編成された。99双軽が使用されて、飛行機のトップに三本の支柱で支えられた信管が突き出ている。爆弾は胴体下部に固定して取り付けられ敵艦船にぶつからないと爆発しないという異様な装置は、正に人間爆弾であり固唾をのんで特攻機に接した。慈愛にあふれた岩本大尉と部下の万朶隊勇士を見送り、その感激の激情が特別攻撃隊へ参加の嘆願書上申となったのである。

昭和二十年四月一日、黒磯飛行場で跳飛弾爆撃訓練を終り兵舎に帰ると、週番下士官が急いで来て、「今朝銚田本校からの通報で、特別攻撃隊へ命令が達せられた」ことを聞く。黒磯飛行場より双練で岸田盛夫、森高夫、私川原文治の三名が銚田本校に帰校した。学校本部に申告に行くと、「即刻福島県原町分校に行き稲垣少佐より99単襲の伝習教育を受けよ」と指示された。今日まで双襲襲撃機を操って戦場にゆくことを誇としていたのに単襲と聞きがっかりする。

原町に赴く。稲垣少佐より「貴官達は双襲機の

訓練を十分やっているので単襲機は何ということはない。今日と明日で十時間位自由に飛んで来い」といわれ、離陸浮揚速度と着陸接地速度を教えられる。格納庫前には三機が我々を待っていた。単襲機は宇都宮飛行校卒業以来乗ったことがない。如何に簡単といっても実戦機であり多少の不安もある。三人それぞれ機を決めて搭乗する。森は銚田に来る前に97戦と1式単戦の戦闘機に乗っていたので自信に満ち先頭になって離陸して行く。岸田は仲々慎重である。私は岸田に先に行くと合図して森の後に続く。レバーを全開に押し終るともう車輪が地を叩き操縦桿を引かなくても離陸している。脚固定のため引込操作もない。快翔で実に操縦性能が良く機が安定している。高度二五〇〇米をとり、左右旋回に始まって、次に、緩操作の緩横転、上昇反転、宙返り、背面飛行、続いて、急操作の急横転、急反転等をしたが、何をやっても我ながら実にうまくできる。軍偵察機として制作された飛行機であり、このような良い飛行機で特攻にゆけることに今初めて喜びを感じる。一日目はこのようにして五時間の飛行を終る。

二日目は三人で打ち合わせて松島湾に行き、湾内の小島を敵艦船に想定して跳飛弾攻撃訓練を実施した。この二日間をもって計十時間の伝習教育を終了した。

特別休暇が出て「家郷の父兄に別れをして来い」という。喜んで上野駅に着いたが、大宮駅以降が米空軍の爆撃で破壊され列車開通の見込がない。止むなく帰郷を断念して東京の親戚で過ごすことにしたが、望郷の念は絶てなかった。帰隊日が四月十日で遅刻しないように正午までに帰隊した。間もなく岸田、森も帰隊した。

隊長は渋谷中尉で少尉候補者出身の銚田在校の方、他に、少尉二名は特別操縦見習士官出身と幹部候補生出身、下士官九名は私達少飛十三期生三名の他に乗員養成所出の予備下士官と下士候補出身で、私達三名の他は何れも面識がなかった。

四月十日夕刻、原町分校の事務室で振武第64隊員が集まり相互に紹介された。宿舎は今夜から原町の元遊廓であった柳屋亭に変わりトラックで送られた。

日常生活は、初めの四日位は夕刻早く帰舎できたが、四月十四日ごろから専ら夜間飛行訓練が開始された。訓練が終ると、一同揃って各地で催された慰問会場に行き、帰舎は夜十二時前後であった。翌日正午近くまで就寝し、午後三時にトラックで飛行場に行き飛行訓練するという繰り返しの日であった。

飛行演習は日曜日も雨の日も続行された。毎夜松島湾に散在している小島を敵艦船に想定しての攻撃演習で、高度四、〇〇〇米、五、〇〇〇米で接敵し急降下から超低空攻撃が主で延一四〇時間位であった。

五月二十六日、第六航空軍に転属命令が達せられた。

五月二十八日午前十時ごろ、原町飛行場を離陸し大阪の大正飛行場へ前進する。五月三十一日まで同所で待機したが、飛行演習はなかった。

休暇の出たある日、岸田、森、私の三人で外出

した。重貞を捨ててゆこうということで大阪の街に出た。途中で岸田が「生れたままの清纯な体で逝きたい」というので思いとどまり、街を歩き回り宿舎に帰ったことがある。その日森の父母が面会に来ていた。

五月三十一日、大正飛行場を離陸し九州の目達原飛行場へ前進した。ここで待機するようにいわれ出撃日が近づいたことを知る。

宿舎は近くのお寺さんが割当てられた。目達原に九日位いたが、連日婦人会や各地区名士の方々の慰問激励の招待が続いた。

我々より後に到着した特攻各隊が続々と離陸して知覧に前進していくのに、我々には前進命令が達せられない。不思議に思っただけで、「六航軍特攻部隊中の精鋭のため待機させられているらしい」との話であった。

六月九日、鹿児島県万世飛行場へ前進命令が下った。梅雨に入り天候不順である。いよいよ最後の時が来て我等の出番である。夕方目達原飛行場を離陸し薄暮に万世飛行場に着陸した。宿舎は加世田の飛龍荘という大きい立派な旅館で、迎えるトラックで行くと美人の女中さんが多勢いたのに驚いた。

六月十日夜、出撃命令が出たことを聞く。出発は明十一日夜間攻撃らしい。戦闘指揮所に午後二時集合である。

今生における最後の一夜である。木の香りのする新しい風呂に入る。この風呂に入って逝ったであろう特攻隊員の先輩諸氏を想い我が心中を想うが不思議に平静である。死に対しての恐怖は全く

感じない。遠い所へ初めて行く遠足の前夜のようなのである。怖いのはなからうか撃突のとき痛いのではなからうかと心に問うて見たが全く反応がない。美人の女中さんに背を流してもらい感謝する。

夕食も終り時が刻々と過ぎる。落ちつかないが父宛に葉書を書く、「いよいよ征く時が来ました明日の今頃は沖繩です。大きな奴に見事命中出来ますよう祈っています。さよならさよなら」という内容であった。辞世の句もまとまらずじまいで、他の人々にも便りを出せなかった。落ちつかないのは心の動揺ではなく、書き残したい多くを何から先に書こうか、恥かしくないものを書きたいと考えていたために落ちつけず書けなかった。

六月十一日早朝目がさめる。今夜の攻撃に反撃の銃弾をくぐりぬけて急降下より水平超低空に到達できればよいがと神に念ずる。あとは操縦桿を前に押して目を閉じればよい。

朝食後宿舎前で町の写真屋に写真を撮ってもらう。昼食後迎えに来たトラックに乗り厄介になった山下さん夫妻や女中さんに挨拶をして飛行場に向う。

作戦本部で次の敵状と命令をうける。

「今朝の司偵機報告では、沖繩の天候雨、敵迎撃戦闘機は奄美大島前面に三梯団で、一、五〇〇米、二、〇〇米と、三、〇〇米と、四、〇〇米、四、五〇〇米にいたので直進は不可能である。万世より草垣島上空に出て針路をかえ、台湾の手前を左旋回し沖繩の中城湾と嘉手納湾の敵艦船を攻撃する。任務分担は一小隊と二小队は中城

湾、三小队は嘉手納湾、出撃は十七時に一小隊、以後十分毎の距離をとって二小队、三小队の順序、編成は一小隊長洪谷大尉僚機岸田伍長一小隊二分隊長橋軍曹僚機鈴木伍長、二小队長稲垣少尉以下四名、三小队長巽少尉僚機森伍長と加藤伍長」というものであった。

横田伍長機は故障のため出撃中止となった。次に、全員で気象班に行く。班長の中尉さんが気象図を示して、「低気圧の現在地沖繩で雨、雲高三〇〇米、視界一、〇〇〇米以下」等の説明を聞く。実に最悪の気象状況に加えて夜間である。

気象班を出て隊長を囲む。隊長より「お前達も私も空母や戦艦に体当たりすることを夢見て来たが、艦船を選別せずに目に入った船に突込むこと。輸送船でも米兵が何千人と乗っており、或は飛行機を満載しているのがあると思う。迷うと目的が達成できないことがあるからだ」と訓示された。

その後、岸田、森、私の三人で語り合う。話の内容は「昨日まで全機が一緒に出撃できるものと思っていたが小隊別の出発となってしまった。森が先に突入するが、「私達三人は死後万世飛行場に靈魂が集合し揃って京都まで行く。」岸田は京都で別れ郷里へ、次に米原からは、鈴木は郷里の石川県へ、森は郷里の愛知県へと別れてそれぞれ家へ帰ろう。六月二十日正午には靖国神社の大村益次郎銅像前に集合を約束した」というものであった。

死を数時間後にして淡々とした心境であったが、これは、東航校(少年飛行兵学校)以来培われ

た忠君愛国や海ゆかばの教訓であり、近況には激戦の戦隊の先輩操縦者が次々戦死し、機種改変と戦力回復のため後方で操縦者を補充し新機種に換えて戦場に飛び立って行く。また毎日特攻体当り攻撃が続けられ、我々の順番が来て出撃するのは当然と覚悟ができていたためと思う。

戦場が後退して沖繩攻防戦となつてしまひ日本は劣勢である。戦争に勝つとは思われず、日本人全員戦死した時が終戦であろうと思つてゐた。しかし、我々は勝つことを信じて死んで行くだけである。死が早いか遅いかの違いである。私は盛大にもてなされて出撃できる身の幸福を感じた。

必勝を信じ敢然と死地に赴いた友とは四十数年が過ぎ去り、私は奇遇にも長生きし齢六十歳になっている。当時を顧みて最も生き甲斐をもって過した東航校、宇飛校、八日市、銚田飛校の約四年間が、我が人生における最大の華道であつたようにおもふ。

肝胆相照らし苦楽を共にした同期諸兄、余生を戦に逝きし友の冥福を祈り、相扶け励まし合い親交をもって生涯を終りたいと念願するものである。

## 特操之碑頌徳祭に 参列して

田中市郎衛門

去る十月九日京都霊山護国神社において、第十二回特操之碑頌徳祭が催された。

特操の制度は、昭和十八年日本の戦況が急速に悪化し、存亡をかけた総力戦となつた十月、二、五〇〇人の若人は学業をなげうち陸軍航空を志願し祖国の危機に立ちあがった。

引続いて二期以降は同年十月二日の勅令による在学徴集延期臨時特例が公布され文科系学生の徴兵猶予が停止され、この非常措置により同年十二月以降入隊した。

特操の総数は一期〜四期で六、三〇〇人に及び戦没者は八九五柱、うち特攻戦没者は一期二三二柱、二期七五柱、三期五柱、計三一二柱であつた。

特操之碑は、戦陣に散華された特操戦士の御霊を慰霊し併せて特操の足跡を後世に伝承したいとの主旨で、昭和四六年碑が建立されてから隔年ごとに碑前祭を開催している。昨年は碑の改修を行い、碑の裏面に戦没されたご英霊名を配列した銘牌板を整備し、新装碑の入魂式が盛大に挙行された。

今年の頌徳祭は司会の武田氏から、本年は入校五〇周年の記念すべき年に当りますとの挨拶があり、学業半ばにして征つて還らなかつた友の胸中を思い黙禱をささげ、「ああ紅の血は燃ゆる」「同期の桜」を全員で合唱のあと、家城特操会会長が祭文を奏上し、玉串奉奠は会長、顕彰会最上理事長・奉賛会・甲飛会・一練飛の代表、今夏話題になつた「月光の夏」の原作者の毛利恒之氏、故込茶大尉の九七才になられるご尊父を初め五四人のご遺族、特操出席者二〇〇余人の各期代表の順に行われた。碑前祭祀終了後、各期別に記念撮影を行い、場所を「ホテルリようぜん」に移しご遺族のご紹介など直会が盛会裡に行われた。



# 財団法人特攻隊戦没者慰霊

## 平和祈念協会認可される

理事長 最上 貞雄

前会長竹田元宮様が平成4年5月11日薨去遊ばされ、新会長に瀬島龍三様をお迎えいたしました。が、新会長は前会長のご意志をつぎ特攻隊の慰霊顕彰事業は更に広く国民の皆様にご認識を頂き、且つ若くして国に殉じられた特攻隊員の史実を正しく後世に伝えてゆくことが極めて大事であるとの主旨より、公益法人にするよう話があり、数次の理事会を開催しこの議を審議し、厚生省と再参接渉、漸くこの11月18日付をもって財団法人が認可されました。

新財団の名称は「特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会」(通稱 特攻隊慰霊財団)となりました。

### 一、設立に当って厚生省の方針

1 同一のカテゴリーの財団は認可しない。  
太平洋戦争戦没者慰霊協会が既に認可されているので、「特攻隊慰霊顕彰会」の名称では認可するわけにはいかない。そこで切口を変えて、平和祈念協会の名称を挿入するよう当局の要望があり、前記の名称とせざるを得ませんでした。

2 基本財産は原則として5億円以上。

この点も交渉の難関であった。

両者歩みより、やっと3億円の線です承、然

### 収 支 計 算 書

自平成5年1月1日 至平成5年10月31日

(単位：円)

収 支 の 部		支 出 の 部	
科 目	金 額	科 目	金 額
年会費	7,495,000	年会費	149,000
慰霊祭	3,648,500	慰霊祭	2,622,038
寄附金	131,314,488	寄附金	675,445
(内基本財産	100,000,000)		
出版事業	2,571,380	出版事業	2,768,067
理事会費	118,000	理事会費	545,898
受取利息	508,270	他事業費	1,040,894
		管理費	3,520,960
収入合計	145,655,638	支出合計	11,331,302
収支差額			134,324,336
財団へ繰入れ額			134,324,336

も特例中の特例として当面1億円で設立を認可するが、5年以内に3億円まで増額することと云う条件で認可されました。

瀬島会長のご尽力で、有力な財界人大久保隆様が個人として1億円を寄附して下さい、やっと設立することが出来ました。

今後又皆様の絶大なご協力をお願い申し上げます。次第です。

### 二、財政状況

平成五年度の収支は10月31日現在別表(1)の通りで、ご寄附いただいた額は、1億3千万円を越えました。当面その中の1億円を基本財産と致しました。

#### 別表(1)

註 支出のうち年会費及び寄附金は前年度収入の訂正分です。

### 三、役員、評議員、参与

寄附行為により、理事10名以内、監事2名、評議員20名以内とされました。役員名簿は別表(2)の通りです。

常任理事であった方に評議員をお願いしました。其の他の理事の方には参与として今後とも今迄同様ご協力の程をお願い申し上げます。

以上設立に至るまでの概要をご報告申し、設立に多大のご協力を戴きました皆様心より感謝申し上げます。

#### 別表(2)

#### 財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会

##### 役員名簿

役職名	氏 名	職 業
名誉会長	寺崎 隆治	元連合艦隊参謀
会 長	瀬島 龍三	伊藤忠商事(株)特別顧問
副会長	田中 耕二	元航空自衛隊航空幕僚副長
同	内田 一臣	元海上自衛隊海上幕僚長
同	山本 卓真	富士通(株)会長
同	石野 清治	(株)資生堂会長
名誉理事	大久保 隆	(株)大久保社主
理事長	最上 貞雄	特攻隊慰霊顕彰会理事長
理事	飯田佐次郎	元三幸工業(株)取締役営業部長
同	山田 達雄	元日本通運(株)課長
監 事	岡田 輝彦	公認会計士
同	小松 利光	元航空自衛隊中部航空方面隊司令官